「人生 100 年時代の新死生観」

＊講師：小島正憲

＊成育環境開発機構・泊まり火会共催

＊令和元年５月１５日／大阪高津ガーデン

（前置き）

小島でございます。よろしくお願いいたします。

いつもは中国関係の話をさせていただくことが多いのですが、山崎様から講演のご依頼があった時、「中国とは縁が切れましたので、中国の話は出来ないし、したくない」と申し上げました。それで、「これからどうやって死ぬか」という話ならできますけれど、と申しましたら、了解されました。まさか、これを受けられるとは思わなかった。

「死生観」ということでお話をするのは初めてでございまして、今日は死生観デビューでございます。よろしくお願いいたします。

それで中国のことは全く触らずにおこうと思ったのですが、今日のレジメを見てみましたら、（参考資料として）去年の 11 月に書いた私の中国論、日中貿易戦争と日米貿易摩擦を比較して論じたものが一緒に綴じ込んでもらってありますので、少しだけ話をさせていただきます。

私は 30 年前に日本を捨てて中国へ行きました。わずか４、５年の間に大儲けしまして、５年間で１万人の工場を無借金で作り上げました。大変面白かったです。しかし、中国にいかず日本にじっとしていましたら、間違いなく倒産していました。その後、中国で楽しくやっておりましたが、2003 年頃に、さすがの中国も人手不足になってきました。この時に僕は「あれ、おかしいぞ、中国は」と思ったのです。それで「13 億の中国でなぜいま人手不足か」という小論文を書いたのです。そして皆さんに発信した。そうしたら、総スカンをくいました。学者の先生から「６億人の農民がどんどん沿岸部に出てくる中国で、何が人手不足か、お前のところは給料が安い上に、酷使しているから人が集らないだけだろう」と、かなり叱られました。ジャーナリストの方からも随分叩かれました。

給料はそんなに安くなかったのですが、ワーカーが来ない。昔は 100 人募集したら 1000 人来たのに、その時は 100 人募集したら 60 人ぐらいしか来なくなった。「これをもって人手不足と言わずして何と言うか」、というふうに思っていたのです。だけれど、３、４年経

つうちそれは徐々にハッキリしてきまして、「中国は人出不足になりつつある」ということが既成の事実になってまいりました。2008 年に北京オリンピックがあり、2007 年末に労働法の改正がありました。ソウルオリンピックの時もそうでしたけれど、オリンピック開催国に対して、民主主義世界から民主化ということにものすごく圧力をかけられます。民主化とオリンピックが交換条件のようになっています。ソウルオリンピックの時(1988 年 9 月 17 日～10 月 2 日))には光州事件（1980 年 5 月 18 日～27 日）、中国の場合は、天安門事件（1989 年 6 月 4 日）があり、それを総括せず、民主化しないでオリンピック（2008 年 8 月 8 日～24 日）なんておこがましいと、ものすごく圧力がかかったのです。そのような場合に、一番やりやすいのが、労働法の民主化でごまかすという方法です。結局中国政府は、韓国政府もそうだったのですが、労働法の民主化を行いました。だからオリンピックにかかるところで労働法がものすごく変えられていって、韓国には激しい労働組合運動が成立してくるわけです。

それと全く同じ経過で、2008 年の北京オリンピックに対して、中国政府は 2007 年末から労働法の民主化を行って、要するにそれでめくらましを行った。結果的にそれまでも人出不足とあいまって随分人件費が上がっていましたけれど、同時に労働法が改正されましたから、労働者がストライキをしたら絶対経営者が負けるという状態になってしまいました。それまでは、我々経営者側は非常に楽だったのです。労働組合の委員長が経営者側ですから。そういう状況が一転して 2007 年末から変わっていく。ですから私は、2007 年末に、「中国では工場の終わりの始まりだ」と、「だから早く中国から逃げなさい」と何度も書きました。「労働集約型産業、つまり労働者をたくさん使う企業は早く逃げなさい」と、2007 年末に何度も何度も言いました。そこでもまたアホにされました。当時はまだ、「中国のように良い工場環境が整っている国はない、中国以外にどこに行ったらいいのか、中国でまだまだ稼げる、もっともっとやれる」という声が大きかったのです。

だけど僕は 2010 年に、これはもう絶対に無理だと考えて、バングラディッシュに行きました。バングラディッシュに行って、10 年やりました。ここで現在 2500 人の工場を作っています。５年前にはミャンマーで工場を作りました。今 1500 人ぐらいです。去年の始めからフィリピンに工場を作っています。中国外に現在 3 つ作りましたので、中国の方は来年で全部やめます。

考えますに、10 年前にバングラディッシュに出てなかったらどうなっていたか。現在米中貿易戦争の中で、とにかくみんな慌てふためいて東南・南西アジアの方へ工場を移転させています。そんなことは 10 年も前にわかっていた。僕は 10 年前に行ったから現在がある。もし行かずに、中国にじっとしていたら間違いなく倒産しています。そういう意味では、学

者の方とかジャーナリストの方と中国の見方は全く違います。違うのでいつもバカにされますが、それはいいのです。中国で１万人の工場を経営していた時よりも、今３工場で５千人弱ですけれど、今の方がよく儲かります。な最初からこういうことを考えてやった訳ではないけれど、とにかく仕事がたくさんある。儲かります。このような私の企業の動きを長いスパンで見ると、日本に居続けたら完全に倒産していたし、中国にずっと居ても倒産していました。おもしろいものです。

これは非常にミクロな私の経験です。だけど、米中貿易戦争のあおりで今が一番儲かっています。本当に面白いです。だけれど、もう自分の体力が続かなくなってきましたので、ひとまず中国の工場は閉めます。したがって中国情報は、もう入ってきません。また僕自身も、今中国に行くと具合が悪い。実は５年前に、モンゴルで暴動調査をやっていた時に公安に捕まりまして、拘束されました。これで一巻の終わりかと思いました。でもあの時に捕まって良かったのです。今だったら絶対に禁固何年ということになっていました。１日拘束されました。殴られはしませんでしたけれど、トイレに行かせてもらうのにも困りました。８時間ぐらい缶詰にされて、何とか夜に出してくれましたので、もう一目散に日本に帰ってきた。日本の空港に着くと涙がぽろぽろ出てきました。よく帰って来られたということで。だからもう中国には行けませんし、工場とも縁が切れましたので、中国の話は、僕にはできない。したとしても、的外れになりますので、やらない、そういうことであります。

（本題の前に）

その代わりに、そろそろ死ぬ時期に入ってまいりましたので、どうやって死ぬかということに、非常に興味が出てまいりました。関連本を片端から読んでいます。昔から本を読むのが好きだったのですが、この２年ぐらいで、300 冊ぐらい次々と出る本を追いかけて読んでいます。また死生観に関する人の話を、できる限り聞くようにしています。宗教者の話は分りやすいのですが、哲学者の話はやはりわかりにくい。それに、面倒くさい。僕は宗教家でも哲学者でもないのですが、いろいろな経験をしてきまして、自分でこうではないかなと思うところを、今日話をさせていただきます。何しろ初めてですので、中途半端な話に終わるかも分りません。そして極めて生意気な話になると思いますけれど、どうぞよろしくお願いします。

－　－　－　－　－　－　－　－　－　－　－　－

（本　題）

人生 100 年時代と言われるようになりました。これは大変な時代です。織田信長の時代は人生 50 年でした。最近まで人生 5〜60 年でしたが、今は有に 100 年は生きられるということですから、大変な時代に入ってまいりました。何が大変か、僕は「人格破綻」、「財政破綻」の２つのパターンがあると思っています。

「人格破綻」は認知症の問題。１００歳まで生きたら、間違いなく認知症になる。ならない人は例外です。もうひとつの「財政破綻」には２つあって、個人の懐の破綻と、国家の破綻。我々が長生きすればするほど国家が破綻するのです。だから、「早く死んだ方がいい、いかに早く死ぬためにどうしたらいいか」、というのが私の結論です。こういうことを言うとたいがい反発をくらうだろうと思うのですが。

人格破綻について、すなわち「認知症」の問題ですが、この、認知症」と名前を付けたところから間違いが始まったと思います。曖昧になってしまったのです。元々は「痴呆」「ボケ」と言っていたのを、認知症と呼ぶようになった。認知症とは、基本的にはアルツハイマー、ピッグ病、脳血管性障害等々の病気のことです。だからこれは、若い人でもあるし年寄りでもある、これは病気です。ところが、75 歳以上になってきた時に、頭がボケる、これは老衰であり、病気ではありません。老衰は医療の対象外なのです。それを「認知症」という名前を付けたことによって、75 歳以上もすべてひっくるめて病気として、医療の対象とし、医者と薬屋が儲けている。私はそう思っています。したがって、認知症という名前を付けてはいけないのです。基本的に 75 歳前は認知症、75 歳を過ぎたらボケ、痴呆というべきであって、そこは薬を使っても何をしても、老衰ですから何とも仕方ない。そういうことで、僕は認知症という名前を付けたところに大きな誤摩化しができてしまったと考えます。

一昨年に 99 歳になる実母を自宅で看取りました。介護はわずか 1〜2 年でしたけれど、やはり最終的にはボケて大変でした。最後は下の始末までしました。僕は本当に母親を尊敬していましたので、おむつを替えてもらったお母さんのお尻を拭かなければならないということには、すごく抵抗があったのです。今から思い返すと、僕の辛さよりも、母の方が辛かったのではないかと思います。ボケたと言っても「まだらボケ」です。正常な時ととんでもない時がありますから。お尻を拭いている時にあまりにも何度もだし、こっちも腹が立ってくるので、「息子に尻を拭かせておいて、お母さんはどう思っているんや」って、つい言ってしまいました。そしたら、そういう時だけ頭が正常になるのです。何て言ったと思います？「光栄やと思え」と言ったのです。私はハッと目が覚めました。そして「そうか、光栄やと思わないかん」と思い直しました。

年寄り連中が集ってボケた人の介護の話をしていると、いろいろと面白い話が聞ける。一

番面白かったのは、ものすごく亭主関白なご主人がボケて、奥さんがそばで一緒に寝て夜も介護をしていると、ある日そのご主人がガバッと布団の上に起きて正座して、「私のような者のところによく来てくださいました。長いことありがとうございました」と頭を下げられたそうです。おそらくボケて本音が出たのでしょう。

あるいは、私の知人のお母さんで、戦後８人の子供を育てた立派なお母さんがボケた。お父さんは若い頃から出張が多くて子育ては大変だった。しかしお父さんの出張のたび、８人の子供を抱えて、「大丈夫です、私がすべて面倒をみます。あなたは好きなように活動してください」と、毎回そう言いながら送り出したそうです。そのお母さんがボケてから、お父さんがたまたまどこかに出て行こうとした時、お母さんは、お父さんの服をつかんで「あなたは私を放っておいてどこに行くのですか！」と叫んだそうです。見ていた知人は、これがお母さんの本音なんだろうと思ったそうです。

いつも女房に、僕がボケたら絶対正座して「ありがとうございました」って言う。お前はボケたら、絶対僕を叩くかツネルだろう、そして僕もほとんど家におりませんので「私を放っておいてどこに行くのですか」と言うだろうと、笑っているのですけれど。友達も、お前がボケたら、毎日あざがないか点検しに行ってやるから心配するなって言ってくれています。

高齢になれば、がんや心筋梗塞や脳梗塞などの病気になるか、それともボケるか、どちらか二者択一ですからね。だから多くの人は、ボケる方へかけておいたらどうでしょうか。僕はとにかく子供に迷惑はかけたくない。女房にも迷惑をかけたくない。ボケることは間違いないけれど、僕は女房には介護してほしくない。ツネられる可能性があるから。では、自分がボケたら介護者は誰なのか、そういう所をハッキリさせておかねばならないでしょう。正直な話が、私は自分で勝手に死んで行きたい。それにはどうしたらいいか、ということでいろいろ考えておるのです。

うちは父と母がもの凄く仲が悪かった。父は 30 年ぐらい前に死にました。母が死ぬ時、絶対に父とは同じ墓には入れてくれるなと言って死んでいきましたから、地元の墓には納めず、京都の西本願寺にお骨納めをさせてもらいました。

僕は海外で死にたいと思っていますので、墓があっても仕方がないなと思っています。女房も別に墓に入りたいと思っていないという。子供も遠くに行ってしまって、帰って来ませんから、墓を壊すことにしました。精抜きをして、墓終いをしたのです。お墓が砂利になる

ところまで見届けました。そうしないと最近はお墓を不法投棄する人達がいて、そこら中にお墓のお墓があるのです。私は最近の通信の中に「お墓のお墓」というのを書きましたが、僕が見てきた三重県の名張には、1000 基ほどありました。他のある市には１万基ありました。お墓を取りつぶしにかかるので、どんどん増えると思います。

ではお墓が無くなると、皆さんはどうしますか。最近では樹木葬とかいろんなものがあります。中でも散骨が流行りですね。しかし、環境破壊だとか、海には捨ててはいけないとか、散骨をする場所が問題です。たまたま新聞を読んでいましたら、隠岐の島に散骨島があるのです。今日こういう話をしなければならないので、ゴールデンウィークに見に行ってきました。１年の間に２回、５月と９月しか漁船を出してくれないので、その島に行くのは大変。小さな島で、きれいにし整備してあった。そこに完全な灰にした状態で撒くのだが、最初は漁協組合とかいろんな所と問題になったそうです。だけど、個人の島ですし、完全な灰にして撒くという状態なら埋葬ではないということで、法律上の問題はないだろうということになったそうです。もう 10 年ぐらい前からやっておられて、現在 200 組ぐらいがすでに撒かれている。さらに生前予約が 150～60 組ぐらいあるそうです。このような散骨がこれから流行ってくるのではないかと思います。

うちにも大きな仏壇がありまして、これを断捨離するにはどうしたらいいんだということになりました。誰も面倒をみませんので、潰そうということになり、仏壇終い屋さんに電話して来てもらいました。いざ壊す段になって、奥から見たことのない位牌も出てきました。私の全く知らないご先祖様が出てきたのです。私が持っていても仕方ないし、息子に渡したらもっと困るだろうと思って、仏壇終い屋さんに相談したら、「１枚 5000 円で処分させていただきます」ということだったので、持っていってもらいました。とにかく、こういうことを言うと、お前はご先祖様を大事にしないのかと叱られそうですが、とりあえず仏壇を、精抜きをして全部壊してしまいました。

子供達に迷惑をかけないよう、とにかく断捨離をし始めました。とにかく今まで住んでいた家には住まないと決めて、思いきって名古屋駅から歩いて１分のところに引っ越しました。1LDK です。女房と僕がそれぞれ使うスペースを決めて、そこに収納できるもの以外は持ってきてはいけないというルールにして、荷物を整理しました。結局、全部合わせると、２トン車に４杯捨てました。捨てるにしても昔は簡単でしたけれど、今は大変難しいですね。とにかく、完全に処分して家を出て行くのに１年半かかりました。このように墓じまい、仏壇終い、断捨離、こういう順番で行い、最後に車の運転を止めました。車をやめるために、便利なところに引っ越すことを決断したのです。

次は財政破綻についてです。個人の財政破綻については、月額 1000 ドルで介護者４人付き生活が可能。月額 10 万円で介護者４人付けて、それで悠々自適の生活が可能ですので、そういうことを後で提案します。日本国家の財政破綻については、医療費を節約する、介護費を節約する、国の借金を返済するという３本の柱で、解決をしたいと思います。

２番目に、実際に死ぬということになりますと、ついつい考えるのが、死後の世界はあるのだろうか、無いのだろうかということ。個人的に言いますと、私は霊媒体質と言いますか、霊能力みたいなものが自分にあると思います。それで、僕としては今後そういうものを伝えたいと思っています。父が死んで 4、５年ぐらいの時に母と一緒に、ある方に高野山に連れて行ってもらい、霊媒を呼び出してもらうという体験をしました。4、50 人で、ある一人の霊媒を囲んで、お祈りしていると、歩いている霊媒師が、誰かの前でピタッと止まる。そこで、その人に対して的確な事を言うわけです。僕の前でも止まりました。そして「もの凄く強い霊が今あなたの前に出ています。お会いになりますか」と言われた。強い霊っていったって、おそらく親父だと思っていますからね、「会います」って言ったら、後ろで母が僕をつかんで「私は会いたくない！ 会いたくない！」って言うものですから、その霊媒師が「そんなに会いたくないのでしたらやめますか」と言ってくれたのです。あの時に会っておけば面白かったと思うのです。母親がまだボケていない頃に、「親父に会うのを邪魔された」と、何度もからかったりしました。

あるいは恐山（おそれざん）（下北半島の中央部に位置する活火山である。カルデラ湖である宇曽利山湖の湖畔には、日本三大霊場の一つである恐山菩提寺が存在する）などにも行って、自分の感覚を確かめたりします。ひたひたと霊感みたいなのが押し寄せてくるのを感じたりします。恐山のなかには、もちろん霊媒が呼んでくれるのもありますけれど、お寺の宿坊もあるのです。女房も行きましたけれど、宿坊に泊まらせていただいて、昼間行った恐山の地獄めぐりを、夜にもう一度やろうと思った。しかしとにかく不気味で恐かったので、やめた。

結局のところ死後の世界が有るのか無いのかということですが、あると考えた場合に、天国のような極楽がある、死の恐れから逃れていく方便として天国を考える人と、前世の苦しみから逃れるために何とか天国、極楽に行きたいと考える人がいます。もう一つは、地獄。どうせ俺の行く道は地獄しかないと、腹を決めてしまう。僕は自分の行く地獄を決めています。行く地獄はこれしかない。40 代ぐらいの時に、梅原猛の「地獄の思想」という本を読んだのです。「往生要集 (注-1)」をわかりやすくした本です。地獄には８つの地獄あって、そ

の地獄がまた細分化されている。僕は、衆合地獄の中の刀葉林地獄(注ー2)に行く。これはどういう地獄か、恥ずかしくて言いにくいので調べてみください。僕は間違いなく絶対にここに行くと公言しています。嫁さんにお前は別について来る必要は無い、絶対来てはいけないと言ってある。男しか行けない所なのだというと、みなさんにはどういう所か分ると思います。私がそこら中で「刀葉林地獄に行く」と言ってまわっていますので、だいぶん腹も座ってきました。言ってないと実現しませんので。そういう意味で恐山の地獄にも行ってみたのです。
死後の世界が有るか無いかに、「有る」と考える人は、極楽か地獄か、それをどちらか考えるのですね。逆に「無い」と考える人は、そこに物理的な死があるだけで、散骨で灰になったら終わりという。物理的死だけがあるのみです。

(注-1)
往生要集は、比叡山中、横川の恵心院に隠遁していた源信が、寛和元年に、浄土教の観点より、多くの仏教の経典や論書などから、極楽往生に関する重要な文章を集めた仏教書で、1 部 3 巻からなる。死後に極楽往生するには、一心に仏を想い念仏の行をあげる以外に方法はないと説き、浄土教の基礎を創る。
(注-2)
刀葉林へは愛欲に溺れた男女が行くとされる。文字通り、樹木の葉が刀のように鋭くなっている。 刀葉林の上から美女が手招きしており、登って美女を抱こうとすると美女が下に消える。 下で美女が手招きしているので、刀葉林を降りて抱こうとすると、美女が上にいる。これを永遠に繰り返す。その間、亡者の体は刃のように鋭い葉でボロボロになっていく。
ちなみに美女は十二単姿で口に扇子をくわえて手招きしている。

死というのは恐ろしいのか、恐ろしくないのか、という問題ですが、僕は若いときにある僧侶から、こういう話を聞きました。若い時は、死ぬということは、清水の舞台から飛び降りるようなものだと。60 代ぐらいになると、縁側から飛び降りるぐらい。80 歳過ぎたら畳のへりを渡るぐらいだと。私は 75 歳近くなってきても、まだ縁側から飛び降りるところまでいかない。畳のへりなんてとてもじゃない。若いときは信じていましたけれど、年寄りになるに従って、あの坊さん嘘ついたのだと思っております。

宗教家の言うことはあまり信用していません。これも 20 年ぐらいですか、毎日新聞社から、「百人の禅の高僧の遺偈」という本が出版されたので、購入し全部読みました。禅の高僧でも 100 人 100 様。一番面白いのは、「俺はもう死ぬのだ、俺の糞を天国の神様に土産に持って死ぬ(朦々として30年　淡々として60年　末期に糞をさらして梵天に捧ぐ)」というのが、一休宗純。もう一つ面白い

と思ったのは、修業をして心身が非常に清らかになった禅の坊さんが、死ぬ間際になって、「30 年前のあの恨みは今も忘れないといって死んでいく（30年前の恨み未だ消えず　幾回か屈を受く爛藤条　今晨怒気人に向かって噀す　喝一喝　却胥江八月の潮）」そんな坊さんもいる。色々です。千差万別だということがわかって、宗教家のこともあんまり納得いくものではないと思っています。

では何が恐ろしいのか。死ぬ事自体が、恐ろしい。何もなくなってしまう。自分がなくなってしまうこれが何となく恐ろしい。そういうことなのでが、これの回避策は、東洋人と西洋人で、かなり違う気がします。

たくさん読んだ本の中でもっとも多いのが、死んでからどうなってしまうか考えたって仕方ない。だから今を充実して生き尽くしなさい、という考え方です。これは西洋人に多い。死ぬことを恐くなくする解決策は、今を充実して生きていきていくこと。100歳以上で頑張っている人が、今に花を咲かせなさいという。逆に東洋人の方は、死ぬというのは、ごくあたり前のことですので、あきらめなさい。今まで十分生き尽くした。素晴らしい人生だった。足るを知りなさい。穏やかに死んでいきなさい。これは東洋人的な諦観、諦めです。本を読むとどちらかのパターンで、他のパターンはないのです。

よく考えてみると、お釈迦さまは断食苦行をされました。おそらく断食苦行をして、霊感みたいなものを身につける。そういうためにやったのだろうと思います。僕も断食苦行をやりましたので、この感覚は分かります。お釈迦様は、腹が減ったせいかわかりませんが、結局やめた。お釈迦さまは断食苦行に挫折したのだと思うのです。その結果分ったことは、すべて諦めればいいのだ。諦める、足るを知る、そういうところにお釈迦さまは行き着いたのだろうと思います。

少し話の角度は変わりますが、自殺、自死というのは、悪いことか良いことかということですが、僕は個人的に悪いことではないと思っております。ただし、一人で死んで3ヶ月も半年も見つけられずに部屋中臭くなって大変なことになっている、というように他人に迷惑をかけてはいけない。また、残された人が自殺幇助罪に問われないようにしておかなければならない。そういうことであれば自死も悪いことではない。聖書にも自殺が悪いことであるとは書いていない。あるいは、僕は、人の犠牲になって死んでいくということは、非常に尊いことだと思っていますので、そのような死に方をしたいと思っています。犠牲死も自死です。でもこれは尊い、僕はそう思っています。

僕が考える「認知症から逃げる方法、あるいは人格破綻の回避策」は、①最大限にいきいきとして、いつ死んでも文句の言いようがないように、「はい、死にました。ああ素晴らしかったな」と言われるように生きなさい、②諦めなさい。それはもうすべて仏様の思し召しです。そういう運命なのです。というどちらかのパターンです。哲学の死生観は原書で読んだこともありませんし、哲学者が考

えるパターンというのは僕には語れません。大学の先生や人から聞いたことはありますが、私には語る能力がありません。

ただ、人生 50～70 年ぐらいの時の死生観というものと、今 100 年時代の死生観は明らかに違うものを作らないといけない。僕は、それは「楽しく死ぬ」という考えだと思います。これが、今行き着いた結論。「死ぬことが楽しい」という死生観を確立することが大事だと思っております。私たちの世代で言うと、アベノミクスが悪いとか、何とかが悪いとか、色々言う人がいるけれども、それでもあなたは戦争に行かなかったじゃないか、飢え死にしなかったじゃないか、こんな素晴らしい人生を、我々は満喫してきたではないか、だから、あとは「楽しく死ねばよい」と言いたい。

ただここまで来て、やり残したことはないか。もっとやりたいことはないか。いろいろ、いざ死ぬとなると、そういう問題が出てきます。私は今までいろいろなことをやってきましたけれど、ごく最近、自分はどれだけ常識という枠にとらわれて生きてきたか、残念やったなと感じます。あちこち走ってみたけれど結局お釈迦さんの手のひらを出られなかった。常識を外れて生きていきたい。もう死ぬのだから、そういうものからもう全く離れて生きていきたい、というふうに思うようになりました。

私は趣味で、戦国古戦場の研究というのをやっております。秀吉や家康が戦った跡、これは全て私が歩いて説明をして回れます。今、日本でそれがやれるのは私だけです。私以外は帝国陸軍参謀本部に居た軍人です。みんな死んでしまった。その先生から直接僕は教えてもらいましたので、今それを語れるのは私だけになりました。

実は一昨年から3年にかけてかなり歩きました。そしてほぼ一冊に書き上げました。ところが、去年の夏ぐらいから新説が出てくるようになったのです。一番驚いたのは、「関ヶ原の戦いは無かった」。どう思われますか？　僕は岐阜県の出身ですから、関ヶ原はいつも近くにあった。僕は関ヶ原の戦いを何度も何度も回って、おかしいと感じるところはあるのです。しかし、通説ですから。大河ドラマでも、みんなそうですから、そう洗脳されています。おかしいけれど、仕方ない。しっかりした歴史資料館にも書いてあるのですから。ところが家康という人は、戦いの時にいつも小高い山の上に陣取る、勝山とか岡山とか、茶臼山とか全部そうだった、戦場に必ず小さい山があります。そこから戦場を見る。でも関ヶ原の家康の陣地は窪地で、四方八方から睨まれるところです。あんなところに家康が陣をしくはずがない。僕は始めからそう思っていましたけれど、歴史家の錚々たる方をはじめ全部そう書いているのですから何とも言いようがありません。ところが本郷和人さんあたりが引っくり返してくるのです。ですから、本を出そうと思っていた私は困るのです。これは、5、6年待って、新説が全部出尽くしてからしか僕は動けないと思っています。この様に常識というのは、我々を縛

ってきたのです。私はそう思った。僕の人生は情けなかった。

楽しく死ぬことについて、もうここまで来たのだから好きなようにさせてくださいと、嫁さんにもそう言ってます。お前の邪魔になったら外してくれ、この年になっても一夫一婦制を守らないといけないのか。つねられても良いから外してくださいと。ボケたらボケた時の話で、まだ正常なうちに自分の好きなことをやりたいということを言っているのです。

だいたい矛盾しているのです。どんな本を読んでも、高齢者が若さを保つ秘訣として、必ず、異性と付き合うことと書いてある。だけど、人畜無害になったので、大手を振って実際に不特定多数の異性と付き合う、すると他人からそれは不倫だと非難される。妻からも怒られる。若さを保つために「異性と付き合う」。しかし、結果として叱られる。そういうモラルを保てというのなら、「異性と付き合え」と書いてはいかん。最近では、こういった常識というのが極めておかしいと思うようになってきた。

あるとき本を読んでいたら、こういうことを書いてあった。ある介護士さん、ちょっと身体が不自由な介護士さんだったそうですが、仕事中お爺さんに、「ちょっとおっぱい触らせて」と言われたそうです。そうしたら、その介護士さんは怒って、私が障害者だと思ってバカにしているのかって、本気で怒った。看護士さんが次の日出勤するとお爺さんは亡くなっていたそうです。その時介護士さんは、そのお爺さんは自分のお母さんを思い出して私のおっぱいを触りたかったのだろう、触らせてあげればよかったと思ったそうです。つまり常識というのは、そういうもので。「このお爺が！」と思っていたのが、「触らせてあげれば良かった」と思たという。

あるいは、私の母も、ボケていくにしたがって、いろいろリハビリをやらないといけなくなった。リハビリの時に、若い男のリハビリの人にやってもらいたいと言う。壮年でも一緒だろうっていうと、やっぱり若い人がいいという。あるいは、私の同級生ですけれど、ある時腕の手術をして、たまたまお見舞いに行って話をしていたら、「私、リハビリが本当に楽しい」と言う。実はリハビリしてくれる男の人がたまたまおっぱいに触れるとビリビリっとする、というのです。70 歳のお婆さんでもこうなのです。

それと、私は、みなさんのお役に立とうと思って、ツボ押しの教室で練習をしています。ツボ押しでみなさんに健康になってもらおうと。生徒は 70〜80 歳の爺婆です。若い子は一人もいません。あんまり極端なことはいかんですけれど、どこ触ってもあんまりどうもないです。面白かったのは、女の人は、「小島さんあんた上手やね、やってやってって」というのです。やってやってって、腋の下とか肩とかツボ押しをやるのです、特に足は集中的にやります。とにかくツボ押しが上手だからモテるの

です。今更モテたって仕方ないですけれどね。

いつ入っても良いサークルですから、常に新しいお爺さんお婆さんがいる。比率はだいたいお爺さん1人に対してお婆さん4人です。新しいお婆さんが入ってくると、はじめはしとやかにしているのですが、しばらくすると、「小島さん、ここ、やってやって！痛いの！」っていうようになる。女性は箍(たが)が外れてくる。僕は、箍は外れた方がいいと、最近本当にそう思う。

「楽しく死んでいく」ということ。また自死は社会貢献であること。その二つを共に満たすのは姥捨て山ですね。こういうものをもう一回日本に作りだして行く。しかし日本ではなかなか難しいので、私はこれを、海外に作りだしたいと思います。それでも、僕も 90 歳ぐらいまで生きていて、もしボケてたら、家で死にたいって、やんちゃを言うようになるかもしれません。しかし在宅死というのは、私はわがままだと思っていますし、介護費の無駄使いだと思っています。

高齢者は、人知れず山の中で、勝手に一人で死ぬ。迷惑をかけたくないなら、海外で死ぬのがいい。私は海外で適地を探してきました。先日はブータンに行ってきました。ミャンマー、バングラ、カンボジア、ラオス、ネパール、ブータン、その辺りが安いです。あまり遠くに行ったら高い。人件費が安いところだと、介護人を4人雇ってもらっても月額400ドルほどで済む。食べ物は、年とって死にかけていたらあまり食べませんから、月額 100 ドルあれば十分です。住む所も、2～300 ドルあれば大丈夫。したがって月額 1000 ドルあれば、十分やっていける。そこがミソなんです。若い女の子4人つけて、もう何もできませんから、体をさすってもらうぐらい。それだけです。女房もそれはあかんと言わないでしょう。それで 1000 ドル。そういう話をすると、女の人の方が行きたがります。今までで一番いいなと思ったのは、ラオスのジャール平原。ここはだいたい気候がよくて、年間 25 度ぐらいで安定している、温泉もあります。手伝いの給料は月額 100 ドルです。

しかもジャール平原にはなぜかわからないけれど、何千年前から石のお棺がゴロゴロしているのです。何万個もあります。なぜこんなところにこんなものがたくさんあるのかわからないです。ブータンもネパールも良いですね。なぜ良いかというと、完全火葬だからです。ブータンは完全に灰にして、灰になるまで焼き尽くしてすぐそばの川に流してしまう。これはいい、僕は現場まで行きました。実際焼いているところまでは見せてくれませんでしたけれど。

鳥葬の現場にも見に行きたかった。ネパールで、ここでやっている場所を聞いて、途中まで行ったのですが、今はもう環境の変化でコンドルがいなくなり、鳥葬はなくなっていました。ブータンにも鳥葬現場がありました。4000 メートルのところまで車で行って、そこから徒歩で3時間トコトコ歩いて、山の上に行く予定でした。しかし車から降りて、10 歩もいかないところで、氷の上でスッテンコロリと

転び、腰を打ってしまい、身動きできなくなってしまった。一時は頭もぼーっとして、僕がここで鳥葬にされるのかと本当に思った。それでも、30 分ほど横になっていて、やっと動けるようになったので、そのまま帰ってきました。それで、とうとう鳥葬は見られなかったのです。

いずれにしても、海外がいいです。お金がなくても、月額1000ドルあれば大丈夫ですから。僕は海外老人ホームを、作れと言われればすぐに作れます。ミャンマーにもうちの工場があります。バングラディッシュにも便利なところに工場がありますから、その隣に作ればいいのです。うちの従業員が時々覗いて、「虐待されていないかな」と見てくれますから。ボケていると虐待されていても分らないですからね。僕がこういう話をすると、「英語も現地語も全然喋られないから無理」と言われる方もいますが、そのような人には、ボケて日本語も話せないのに、何を言うのかと言っているのです。こうすれば、日本の介護費はかなり節約できます。とにかく安い費用で十分な介護をしてもらえるのですから、海外に出るに限ります。名付けて高齢者輸出大作戦。こういうとみなさんに怒られそうですが、こういうバカなことを言う人が一人ぐらいいても良いじゃありませんか。実際にできるのですから。今、どういう手続きがいるのかも調べています。

医療費も節約しましょう。もう、75 歳を過ぎたら医者にはかからないようにしましょう。といっても、僕も 75 歳過ぎてかかっているかもしれない、その時にはもう人前に出ないようにします。僕は断食も今2ヵ月に1回ずつ、やっています。2泊3日か3泊4日でやっています。若いときは6泊7日やりました。断食で直す、ツボ押しで直す。そうやって自分で病気を直す。西洋医学にはかかわらない。医療費と介護費を、高齢者が使わなくなったら、国家財政はだいぶん楽になるはずです。そうすると残る問題は、国家の借金だけである。

（国の）借金は何だかんだ言っても僕たちが作ってきたのです。僕たちがその恩恵を受けたのです。私たちの後の世代が借金を一生懸命返す。それはいかにも気の毒な話です。だから高齢者が、借金を返さないといけないのです。では、どうやって返すか、私はいろいろな案を今までに出して来ましたけれど、あんまり皆さんに「そうだ」と賛同いただくことはありませんでした。けれど思いついたら話をしていくようにしています。今声を大にしているのは、「高齢者は日本国債を買え」ということ。その代わり法律を変えてもらって、高齢者が日本国債を買う場合だけ利息を 4%か 5%にしてもらう。それで、死んだらその国債は国家に差し上げる。放棄する。

今高齢者が持っているお金はすごい額です。箪笥預金まで数えたら 500 兆円ぐらいになる。しっかり調べていないから、わからないだけ。それだけでもすでに日本の借金が半分減るじゃないですか。だから国債を買って放棄する。利息は4～5％支払うのだが、高齢者が死ねば元金がどんど

ん無くなっていくわけですから、やがて借金は完済される。どんどん高齢者が増えるので、ざっと計算して 20 年ぐらいで無くなる。若い人は国家の借金を全く考えなくてよくなる。そして日本には実際に借金が無くなるのです、老人が国債買って死んでいくのですから。そして借金が無いと思う気持ちが経済を活性化していくのです。間違いなく活性化していく。

誰かがこんなことを言ってるうちに、社会が変わって行くかもしれない。また、もっと違う案が出てくるかもしれない。面白い案がいっぱい出てくるといい。思いきってそういう案をやらないと、人生 100 年時代の日本国の借金を返済することはできません。借金を返済しないままで死んでいくということは、高齢者にとっては許されないことです、私はそう思っています。だから借金を返済してから死ぬ。新たな借金を作らないということが我々の命題ではないかと思っております。

今、日本社会の行く末を悲観的に思っている人が多い。しかし日本は世界一、こんな国は他にないです。高齢者が借金を返してしまえば良いのです。我々の力で返してしまえばいい。全部の力を、頭脳を、知識を、そこに結集すれば、絶対できる、日本人はできる、私はそう思います。

大変お聞き苦しい話だったと思いますが、以上で終わらせていただきます。ありがとうございました。